

# 博物館

ニュース

安祥文化のさと

Anjo City Museum of History

新春

2016.01  
No. 99



大日本麦酒のポスター（大正4年頃）

安城市歴史博物館

# 「時代を彩った美女たち」

会期：平成28年2月13日(土)～平成28年3月27日(日)

江戸時代、女性を描いた錦絵、いわゆる美人画が多数作成され、庶民の人気を集めました。明治期以降には、企業が商品等を宣伝する豪華な大型ポスターや様々な意匠を凝らした市販の絵はがきが制作されますが、そこにも女性の絵が多数採用されています。こうした「描かれた女性たち」は、衣装や髪型、化粧方法などにおいて流行の最先端をいく、いわば時代を象徴する存在でもありました。

今回の企画展では、収藏品の中から江戸時代の錦絵ほか、絵葉書やポスター・雑誌の表紙など、各時代を彩った女性たちの姿を紹介します。

## 錦絵の美女たち



尾張屋内長登 (江戸時代後期)  
吉原の遊女屋尾張屋の花魁長登が禿2人を従えて客のもとに向かう様子を描いている。

18世紀に江戸で誕生した錦絵は「江戸絵」とも呼ばれ、江戸庶民だけでなく、江戸にやってきた旅人の土産物としても人気を集めました。なかでも美人画は、歌舞伎役者やその舞台を描いた芝居絵や、19世紀前半に出版された北斎の「富嶽三十六景」や広重の「東海道五拾三次之内」に代表される風景画と並び、錦絵の主要テーマでした。

美人画に描かれた女性は、幕府の規制により武家の女性が描かれることはありませんでしたが、吉原の遊女など、遊郭の女性の姿を描いたものや、寛政の三美人の一人「難波屋おきた」に代表される茶店の看板娘の絵は、庶民の人気を集めました。また、縫物や身繕いをするなど、女性の日常の姿を描いたものや伝説上の女性などが華やかな色合いで描かれ、人々を楽しませました。

錦絵を含む浮世絵には、情報を伝達するメディアとしての役割もありました。評判の化粧品や着物の柄・色合いなどをいち早く取り上げて画中の女性にまどわせることで、新しい流行を発信してしま

した。美人画は、若い女性にとって新しい流行を知る手段でもあったのです。



今様美女競 水茶屋 溪斎英泉 (江戸時代後期)  
水茶屋の給仕女性を描いたもの。手にしているのは当時流行した白粉「美艶仙女香」

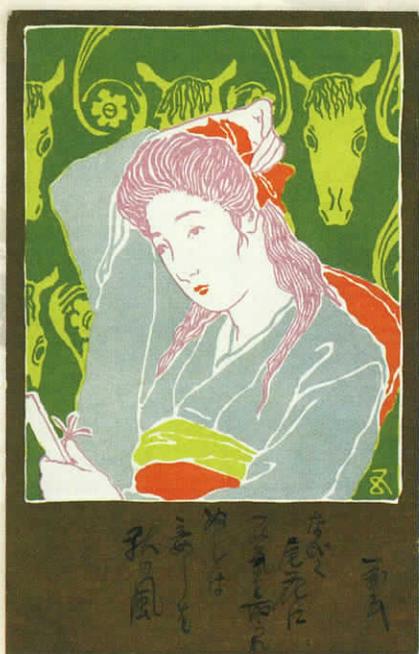
## 絵はがきを彩った美女たち

幕末から明治期にかけて、西洋から石版・金属版など新しい印刷技術が日本に伝えられました。このため毎回木版を彫る必要があり、しかも印刷枚数に制限のある木版画は、新しい印刷技術の前に衰退していきます。



水野年方画の絵はがき (明治期)

こうした中で、美人画の新たな発表の場となったものに、絵はがきがあります。はがきは、明治6年(1873)に官製はがきの発行が始まり、次第に普及していきますが、明治33年(1900)に私製はがきの発行が許可され、様々なデザインの絵はがきが発行されるよ



中澤弘光画の絵はがき(明治期)

うになると、空前の絵はがきブームが起こりました。女性を描いた絵はがきも日本画家・洋画家問わず多くの画家が絵を提供し、数多く制作されました。

これらの絵はがきからは、描かれた女性の髪型や持ち物などから、時代の変化を感じることができます。また、花や植物などと一緒にデザインしたものなど、西洋で流行したアール・ヌーボーの影響を受けたものも見られます。

### 商品ポスターを飾った美女たち

明治期以降の美人画の新しい媒体として、企業の大型広告ポスターもあげられます。特に明治40年代以降から戦前までのポスターには、女性を描いたものが圧倒的に多く見られます。これは、ポスターの主題として華やかな美人が最も人気が高く、またどのような商品・広告主にも対応できる汎用性を持っていたためです。

明治から大正期は、女性の生活様式に大きな変化が生じた時期です。江戸時代には成人女性の一般的な身だしなみであったお歯黒や剃り眉が徐々に廃止される一方で、束髪やパーマが流行するなど、西洋文化の影響を受けて新しい髪型や化粧、衣服や職業などが次々に生み出されたのです。そして美人画ポスターに描かれた女性たちも新しいものをいち早く身にまといました。美人画ポスターを飾った美女たちは、当時の女性たちにとっては時代の最先端をいく、憧れの存在だったのです。

今回の企画展では、当館の収蔵品の中から、時代の最先端を体現した女性たちの姿とその時代背景を紹介します。様々な美女に、是非会いに来てください。

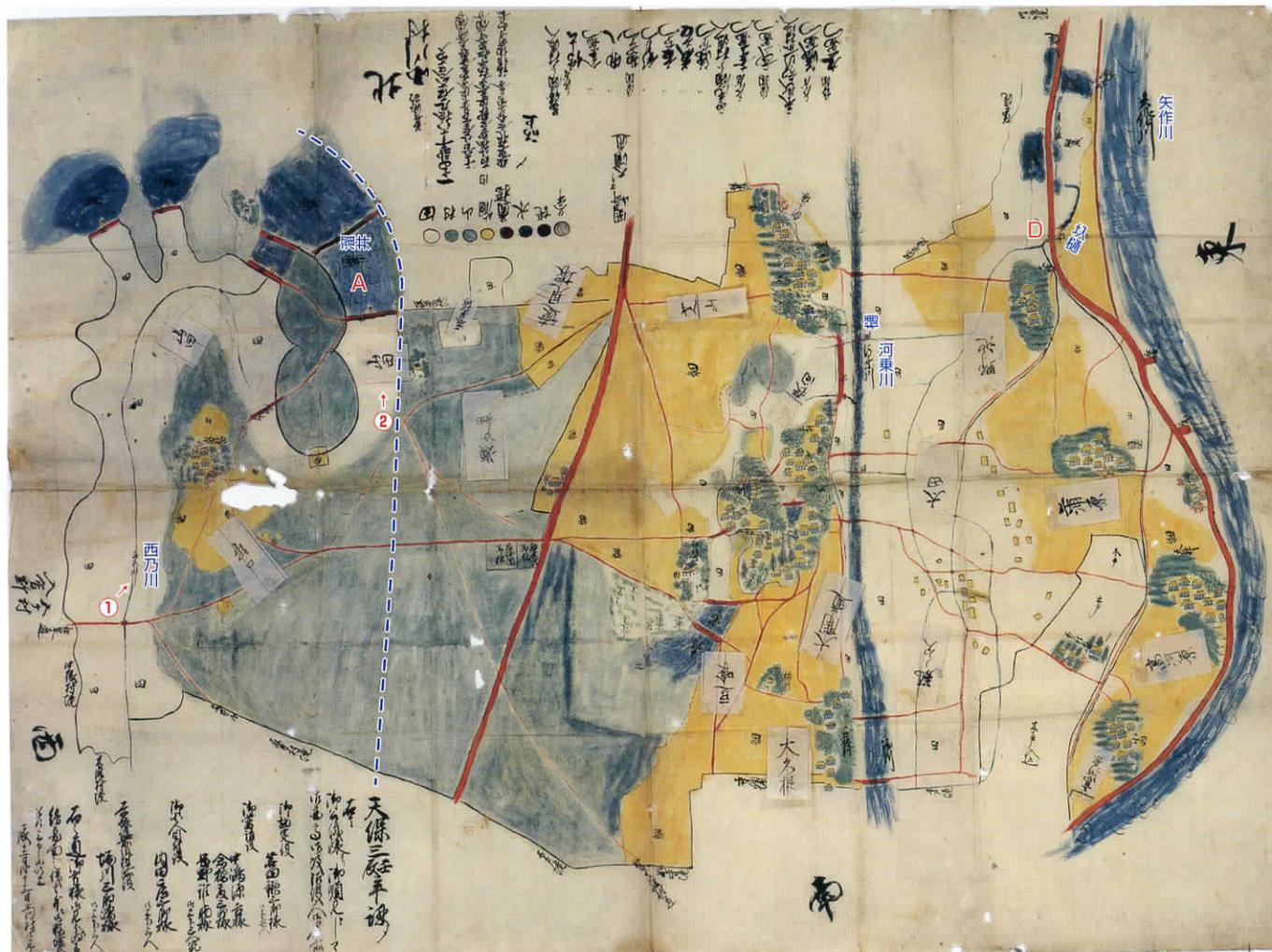
(田中 里張)



日本髪・和装の女性を描いたポスター



断髪・洋装の女性を描いたポスター(昭和9年)



〔図1〕 天保3年（1832）小川村絵図：本館蔵

先回は、小川村絵図の概観をし、西に広がる碧海台地に当たる部分を歩いてみました。今回ももう少し、台地とその開析谷の辺りを歩いてみたいと思います。先回和泉道に架かる橋について触れました。写真1はその橋の上①から撮った写真です。足元を流れるのは朝鮮川、向こう側が上流部で、遠くにみえるのが山中の集落です。朝鮮川が穿った谷に水田が広がり、台地との境の崖の様子がよく分かります。

図1の青色の破線で示したところが現在の明治用水東井筋に当たります。弥厚の新開計画の水路もほぼ同じ経路であったと思われます。小川村の人々は弥厚の新開計画に反対の立場でしたが、この図を見ればその反対理由がよく分かります。水路は堤を築いて引くことになり、堤が切れれば、その水は西乃川（朝鮮川）の開析谷に広がる田に押し寄せることになります。また、水路は分水嶺を通ることになるので、東側に水があふれば、鹿乗川水系にその水が押し寄せることになります。ただでさえ小川村の人々は、村の東に広がる鹿乗川水系の田の水害（湛水）に悩まされていたの

ですから、これ以上水害が心配される水路を引くことに反対するのは当然のことでした。



〔写真1〕 朝鮮川の開析谷の様子

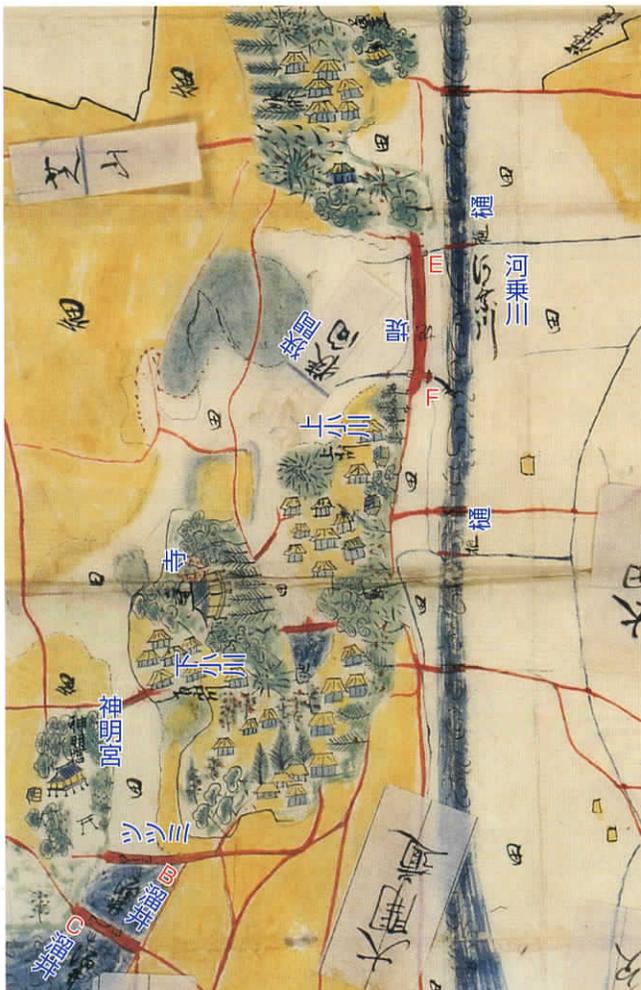
写真2は、図1の②付近から撮ったものです。右側の土手は追田川の堤防ですが、その上部を明治用水東井筋が通っています。左手の田は西乃川の開析谷に古くから開かれた田です。前方奥が、図1のA付近にな



〔写真2〕 図1の②地点から北側を見た現在の様子

り、谷の上流部をせき止めてつくった溜池のあった辺りです。

さて、この村絵図を子細に見ると、注目すべき所があります。その部分を拡大してみましょう。



〔図2〕 小川村絵図（集落部分拡大）

神明宮（現在の小川神社）の南辺りに、溜池BCが築かれ、その水を神明宮の東、あるいは蓮泉寺の西

から北にかけて、さらに狭間と書かれた辺りの田で利用していたことが分かります。ただ、鹿乗川は、矢作川方面で使われた水の排水路でもあり、時にはその水が狭間の方にまで入り込み、水害をもたらしていたことが想像されます。そのために、鹿乗川と狭間との間に道路を兼ねた堤を築き、水を制御していたのでしょう。

河乗川（鹿乗川）と書かれたすぐ上に、樋と書かれています。図1のDの地点で矢作川の水を取り入れ、樋をかけて鹿乗川の西の道路を兼ねた堤（E地点）をくぐらせ、用水として利用していたことが分かります。その水は堤の西を南下し、上小川の集落の北にある排水路（F地点）から再び堤の下をくぐって鹿乗川に排水されていたことが分かります。

今その辺りを歩いてみても、当時の面影はほとんど跡を残していません。わずかに、その樋のあった辺りに架けられた姫樋橋という小さな木の橋の名に名残が残されているのみです。



〔写真3〕 姫樋橋

鹿乗川水系に住む人々にとって、排水問題は長い間死活問題でもありました。弥厚の用水計画に反対する小川村の人々が、木戸付近から矢作川に流れ込んでいた川口を、藤井の土地を掘り割って米津付近にまで付け替えることを願い出たのは、弥厚の新開願書が幕府に出された2年後の文政12年(1829)のことでした。

水不足に悩む人々、水害に悩む人々、それぞれの立場で抱える問題の解決にはその後も長い時間がかかります。明治用水が引かれて水不足の問題は解決しましたが、湛水防除の問題はその後も長くこの地の人々を悩ませ、現在も鹿乗川拡幅工事は進行中です。

参考文献等：『小川の歴史をさぐる』小川町郷土史刊行会、『鹿乗川悪水普通水利組合誌』鹿乗川悪水普通水利組合誌編集委員会、『山新開井堀川御用捨書上帳』、『明治17地籍図』

大正4年(1915)に六ッ美村(岡崎市中島町)の悠紀齋田で供納米が作られてから、平成27年で100年経ちます。

天皇が新米の実りを神々に感謝する祭りを新嘗祭と言い、即位して初めて行うものを大嘗祭と呼びます。大嘗祭では、京都を中心に悠紀殿(東)と主基殿(西)の二つの祭場が設けられ、それぞれの祭殿には卜定(占い)で選ばれた場所で採れた米が供えられます。

大正天皇の大嘗祭では、悠紀殿に供える米を作る齋田地として碧海郡六ッ美村大字下中島が選ばれました。その地は現在、岡崎市に属していますが、当時は碧海郡に属していました。ですから、碧海郡役所のあったここ安城にも悠紀齋田に関する資料が残されています。

大正3年3月の決定後、齋田や社殿の整備、奉賛会の設立など準備が始まりました。そして翌年、供納米が作られました。米作りの節目毎に祓式・御田植祭・抜穂式など様々な儀式が執り行われました。10月16日に供納米は特別列車で京都に運ばれ、11月14日に大嘗祭が執り行われました。

齋田の最寄駅は、国鉄岡崎駅です。しかし、額田郡に所在するため、式典で勅使を迎えるとき等には、碧海郡にある安城駅が使われました。供納米も八幡社での点検式を終えた後、安城町役場に新築された安城町齋館に一晩置き、翌朝安城駅から出発しました。その時の写真が残されています。写真1は、供納米が安城町齋館に到着した時に撮られたものです。浄衣に烏帽子姿の奉耕者が、供納米の入った唐櫃を担いで齋館の中に入って行く様子が写っています。右側にある大きな建物は、安城町役場です。

写真2は9月20日の抜穂式の前日に到着した抜穂使勅使一行が安城駅から六ッ美村へ向かう時に撮影された写真です。駅前から本町



写真1 安城町齋館に到着した供納米

通りを写したもので、右側の建物の看板には、「旅館いまる」の文字が見え、駅前の様子が伺えます。

六ッ美村では齋田の記憶を残すため、記念館を造り、齋田で使われた農具などが陳列されました。現在も「悠紀の里」にて展示されています。また、保存会等を中心に伝承活動も行われています。

(後藤麻里絵)



写真2 安城駅から六ッ美村へ向かう勅使一行

# 歴史団体活動紹介

安城市内には、自主的にグループを結成して歴史に関する研究・研修を行っている団体が多数あります。その中から、歴史博物館で活動を行っている団体を紹介します。

現在、歴史博物館で活動している歴史団体は4団体あります。各団体とも、歴史博物館で、市内や三河地



写真1 三州古文書会活動の様子

域の古文書や遺跡の発掘調査の成果についての学習会を定期的に行っています。また、その活動成果を毎年10月に開催される「安祥文化のさとまつり」で発表

## 歴史博物館で活動する歴史団体

団体名	安城古文書を読む会	連絡先	中筋 孝 TEL 0566-97-8879
活動日時	毎月第1・3土曜 14:00～16:00	活動場所	体験学習室
内容	古文書で見つけた昔の出来事や風習。身近な小さな歴史でも出会いは大きな魅力です。講師のもとみんなで市内伝蔵の古文書を解説しています。		
団体名	安城古文書研究会	連絡先	竹内 英之 TEL 0566-75-2213
活動日時	毎月第1・3木曜 14:00～16:00	活動場所	体験学習室
内容	本證寺文書の「諸事記」を輪番で読みながら、研究も行っています。江戸末期の寺方の文書に興味・関心のある方、どうぞご参加ください。		
団体名	安城考古学談話会	連絡先	神谷 友和 TEL 090-8475-9769
活動日時	毎月第3日曜 14:00～16:00	活動場所	体験学習室
内容	考古学に興味のある人が集まって、毎月座談会や意見交換をして学び合っています。年1回、見学旅行を企画しています。		
団体名	三州古文書会	連絡先	石川真規夫 TEL 0566-41-1668
活動日時	毎月第2・4水曜 9:30～12:00	活動場所	体験学習室
内容	講師の指導で三河地方の古文書を読み解き、内容を理解し、地域の歴史を学ぶことを目的に活動しています。古文書に興味がある方を募集しています。		

をしています。本年度は10月4日（日）に安城考古学談話会が「26年度の活動報告」、三州古文書会が「弥厚と新開計画」というテーマで発表を行い、

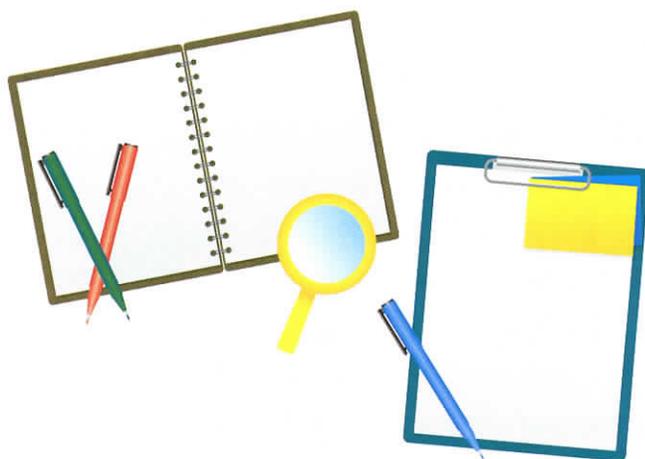


写真2 さとまつりでの発表の様子

安城古文書研究会が「本證寺文書を読む」と題して模造紙にその活動成果をまとめたものを展示しました。

各団体とも会員を募集しています。興味・関心をお持ちの方、何か新しいことを初めてみようと思う方は、下記の各団体の連絡先へお尋ねください。

(野上真由美)



平成27年度  
博物館実習

# 博物館実習

8月19日～21日、25日～27日の6日間



本年度も博物館実習を実施し、学芸員資格の取得を目指す学生7名が参加しました。歴史学を学ぶ学生だけでなく、美術を学ぶ学生もあり、さまざまな大学から集まってきているので、初日は、みんな緊張した面持ちでした。まずは、これまでお客様目線で見えていなかった博物館や市民ギャラリー、埋蔵文化財センターを、運営する側の視点で見学して、こうした施設の役割や必要性を考えました。

さて、博物館実習の醍醐味のひとつは、実際に貴重な文化財に触れることです。本館では、土器などの考古資料や古文書などの歴史資料の取り扱い実習のほか、常設展の展示替えも行います。慣れないものに触るので、初めは手が震え、中には腰が引けている学生もいましたが、徐々に扱いに慣れていきました。

ところでみなさん、博物館にある資料は、どのような手順を経て受け入れられるかご存知ですか。購入であれ、寄贈であれ、まずはきれいに掃除するところから始まります。掃除の仕方は資料によって違います。土器だったらブラシを使って水洗いしますし、金属製品だったらこれ以上錆びないように椿油をつけます。今回の実習では、明治・大正期の古文書を扱いました



古文書の取り扱いの様子

ので、ハケを使って1ページずつ丁寧にチリやホコリを落としました。

そのあと、資料リストを作りながら、その資料がどのようなものなのか調べます。古文書の場合、何が書いてあるのか解説します。今回、明治・大正期と比較的新しいものでしたが、100年以上も昔の人が書いた文章です。そう簡単には読めません。学生たちは、くずし字辞典を片手に四苦八苦していました。



展示替えの様子

実習の中心となる常設展の展示替えは、二つの組に別れ、平安時代の集落を紹介するコーナーと初期の家電を紹介するコーナーを行いました。私たち学芸員にも言えることですが、どんな資料であれ、その魅力を的確に、かつ簡潔に伝えることはとても難しいことです。知識を得るほど、説明は長く、難しくなりがちです。学生たちは、見る人に伝えたいことを、限られた文字数で明確に記すよう心がけました。また、どのように資料を配置すれば見やすいか考え、工夫しました。実習生による展示は、9月の初めまで公開しました。

(後藤麻里絵)